

寢覚

古名

寢覚床

又

三返

前

ワキ
勅使

シテ
老翁

ツレ
里人

後

シテ
三返の翁

ツレ（謡なし）
天女

ツレ（謡なし）
龍神

地は
信濃

季は
春

「賢き君の勅を受け。く。東の旅に急がん。

「そもく是は延喜の聖主に仕へ奉る臣下なり。さても信濃の国木曾の郡に。寢覚の床とて在所あり。彼所に三返の翁と申す者。寿命めでたき薬を与ふる由君聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ見て参れとの宣旨を蒙り。唯今信濃の国寐覚の里へと急ぎ候。

「思ひ立つ。空に重なる雲の袖。く。靡きて帰る雁金も。山又山を越え過ぎて。行けば程なき旅衣。

木曾の御坂も近づくや。嵐に更くる夜半の空。寐覚の床は是かとよ。く。

「急ぎ候ふ間。是は早寐覚の床に着きて候。此所に彼翁を尋ねうずるにて候。

「信濃路や。木曾の御坂の春風に。行方も知らぬ花ぞ散る。

「霞こめたる谷の戸に。

「世を鶯の声しげし。

シテサシ「所から春立つ山路分け過ぎて。

二人「採るや薪の尾上の鐘。臃々と聞き馴れて。たどるや老の坂ならん。

歌

「立ち上る。木曾の麻衣袖しをり。く。賤が家居の業なれば。崖路の橋も馴れく。て。いくへ重なる白雪の。解けて落ち来る谷川の。水も岩根や伝ふらん。く。

ワキ詞

「如何に是なる老翁に尋ぬべき事の候。

シテ詞

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。見奉れば此あたりにては見馴れ申さぬ御姿なり。若し都よりの御下向にて候ふか。

ワキ

「実によく見て有る物かな。是は延喜の聖主に仕へ奉る臣下なるが。此所に三返の翁と申す者。寿命めでたき薬を与ふる由君聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ見て参れとの宣旨なり。彼老翁が私宅を教へ候へ。

シテ「さては勅使にて御座候ふぞや。あら有難や候。総
じて此三返の翁と申すは。生所もあらず出所もな
く。

ツレ「唯おのづから其まゝにて。寐覚の枕松が根を。

シテ「宿りと定むる翁なれば。定めてこゝに来るべし。

ワキ「実にく是はいはれたりと。岩根の枕寐覚の床に。

シテ「暫く御待ち候へとよ。

ワキ「暫し休らふ。

シテ「其内に。

地「日も夕暮に程もなく。く。なるや弥生の空なれ
ば。月も朧にさし出で。山の端白き松の風。枝
を鳴らさぬ木の下に。暫し休らふ旅居かな。く。

ワキ詞「なほく寐覚の床の謂委しく御物語り候へ。

クリ地「そもそも此寐覚の床と申すは。役の行者暫く御座
をなし給ひて。觀念の眠りを覚まし給ふ。

シテサシ「然るに彼三返の老翁は。生所も知らず出所もな

く。

地「唯おのづから忽然と。顕はれ出で、寐覚の床に。千年を送る其内に。寿命めでたき薬を服し。三度若やぐ故により。三返の翁と名づけたり。

クセ「或る時翁申すやう。羿養射術を伝へて。其名を雲の上にあげ。されば愛染明王は。定の弓恵の矢にて。悪魔を従へ給ふなり。我は又御薬の。威徳を以て大君の。代を治めんと思ふぞと。勅使に申し

上げゝれば。勅使喜悅の色をなし。汝如何にと宣へば。

シテ「今は何をか包むべき。

地「我此所に年経たる。三返の翁なるが。目前に來りたり。勅使暫く待ち給へ。夕月の夜もすがら。舞樂を奏し見せ申し。又御薬を与へんと。いふかと見れば老翁は。岩陰に寄ると見えて。行方知らずなりにけり。行方も知らず失せにけり。(中入)

地「天つ風。く。雲の通路吹きとぢよ。乙女の衣色々

に。糸竹も音を添へて。波の鼓声澄むや。海青樂
を奏しけり。

後シテ

「そもく是は医王仏の化現。無病息災の方便の為
め。三返の翁仮に顕はれ出でたるなり。

地

「其時老翁扇を開き。く。青天遥かに見渡しけれ
ば。

シテ

「東南に雲晴れ。西北の風も吹きをさまつて。

地

「花降り異香音楽の響き。舞樂の数々乙女の袂。返
すぐも面白や。

地

「夜遊の舞樂も時過ぎて。く。有明方の月も。落
ちくる折からに。不思議や川波はげしく荒れて。
二龍の姿は顕はれたり。

地

「両龍王は川波に浮び。く。彼御薬を捧ぐる気色。
汀に坐してぞ見えたりける。

シテ

「老翁悦びの思ひをなして。く。彼客人の御慰み

に。神通自在の秘術を顕はして。夜遊の戯ぶれな

し給ふ。(楽)

シテ「かくて時移り頃去れば。

地

「かくて時移り頃去れば。彼御薬を君に捧げ。勅使

に与へて是までなりと。木曾の棧ゆらりと打ち渡

り。帰り給へば。龍神も東西に飛行の翔り。波に

戯ぶれ巖に上れば。夜も白々と明方の空に。く。

夢の寐覚は覚めにけり。